

なぜ「おしゃれ」な縄文人を描こうとしたのか

小山 修三

私は安芸さんが若くて美人だったから、惹かれたのでしょうか。安芸さんがみんぱく（国立民族学博物館）に遊びにきてぶらぶらして、「なにしてんの」と聞いたら、「なにもしていない」と言う、そして絵を見せてもらったら面白い。ああこれは使えるな、と思いました。

それで、二人で方々に探検に行こうということになって、後に『縄文探検』（小山 1998）というタイトルで本を書きましたが、探検と言っても遺跡に行って土器などを見るのではなくて、一つの典型的な例は安芸さんが話しましたが、髪の話です。

縄文の遺跡から櫛が出ていますが、縄文人はどうやって髪を作っていたのだろうかという話になりました。じゃあ、髪結いさんのところに行かなきゃいけない。安芸さんは僕のなじみの芸者とか言っていたが、それは違います。そこには安行式のミミズク型土偶を持っていった。最初はそれを隠して持って行って、舞妓さんが仕事に出る前に髪結いに来たのを見たりして、それで「櫛はどうやって使ってたんでしょうねえ」とかいう話をして、それで土偶を出して見せたら、「ああ、これ、お太夫さんの髪ですわ」と言いました。この不思議なミミズク型とも言われている土偶を見せたら、「この土偶の髪を結うのには、こうしてこうして」と言って、髪屋さんが「ここにこう根を作りますやろ」とキュッとつくって、それをキリキリっと巻いて、その根に前から後ろから、横から後ろから持って行って「こういう風にできます」と。ところが、根元の所にハサミを一本入れると、ぷつつ、バサアッと全部落ちる。亀ヶ岡の土偶なんて、頭がぐじゃぐじゃになっている。あれはそのまま、その髪をひねって、ギュルギュルギュルギュル縛って、丸いのをいっぱい作ったらできます、と。ほどくのが大変で、そうしているとシラミが湧いたり、もう痒くなったりして、大変でしょ

*下部にある註は吉田泰幸による

安行式のミミズク型土偶 縄文時代後期末・晩期前葉の関東地方の土器型式である安行式土器に伴うことの多い土偶。目に相当する部分が円形の貼

り付け文様であることが多く、かつ顔に当たる部分の面積に占める目の表現の割合が大きいことがミミズクを思わせることからこのような通称が定着している。

う、と思いましたが、パサッと、ひとつハサミで切ったら終わりという、そういう原則があることがわかって、縄文人もやっぱり賢かったというか、縄文人も普通の人だったと言うようなことを私はその時に感じました。生活をシンプルに、合理的にやっているなあ、と。

一方で、女どもはすごいというか、男も多分そうですが、耳に穴を開けて大きなイヤリングを付けたりもしている。その文化のゆがみと言うのは、いくらでも出ます。下唇にラブレットをつけてみたり、変なのがいっぱいあります、民族事例で。それも何か理由があるかもしれない。

今日は「おしゃれな縄文人」というタイトルで話します。先のお二人は縄文人の衣装とか、どうやってそういうのを作ったのかという話をしています。先ほど吉田さんの話の中で、坪井正五郎のコロボックル説の話題が出てきましたが、坪井正五郎が手がけた復元画を見て、「ああ、ずいぶん素直な復元してるなあ」と思いました。あの頃はいろいろ細かい事を言わずに、土偶を見て、「これはワンピース」とか「ズボンはこんな風」とやっていて、実に素直な、まともなものだなと思いました。ところがあの時代は、カラーがなかった。私の時は、カラーの時代でした。総天然色とか、パノラマビジョンという時代、映画の「十戒」、例はなんでもいいですが、カラー映画が出てきて、雑誌もカラーになって、という時代にさしかかっていました。それで、縄文人を描こうと思ったときに、「ええっ、色・・・、色はなに?!」というところが、ひとつの出発点だった訳です。

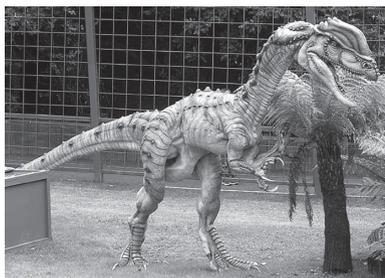


Fig. 2.3.1 カラフルな恐竜の復元

これは縄文人の復元に、影響を与えたものなのです (Fig. 2.3.1)。私は1971年から76年まで、アメリカにいました。ちょうどその頃、あるいはそれよりちょっと前ぐらいから、恐竜というものはどういうものだろう、という話を博物館などでも真面目にやり始めていた。それまでのゴジラのような灰色で長くて、ドテツとしたような怪獣が

映画の「十戒」 旧約聖書の出エジプト記をもとにした1956年公開のアメリカ映画。原題は“The Ten Commandments”で、海が割れるシーンが特に有名。筆者が幼い時もテレビで何度も再放

送されていたこと、団塊の世代にあたる筆者の父親が毎回それを熱心に見ていたことを覚えてい
る。ある世代以上にとっては、特別な映画と考えられる。

出てくる、と思っていた。ところが、恐竜は喉のところに笛みたいな、管みたいな物があるから、それでキュッというような音を出していたとか、トカゲでもよく見たらギンギラギンのトカゲとかもいる、ヤモリとかぼっかり見ているから、灰色のトカゲを思い出しますが、派手なものもある。それから恐竜は鳥の仲間かもしれない、という仮説も出てきた。そうすると、羽根が生えていたりする。走る時はどんななのか、つまり足の構造、二本足で駆けていたのか、びよんびよん跳んでいたのか、とかいうことを考え始めていた。それから、CGが発達したために恐竜の映画やドキュメンタリーの中で復元が盛んになってきた。それは歩き方の復元にまでおよんでいる。最近は恐竜の社会性ということまで言うようになってきた。私がいたときのアメリカはそういう今の流れの走りだったのです、1960・70年代というのは。ではなぜそうなったのかというと、大きな影響を与えたのはミッキー Maus・クラブで、あれが面白かったのです。ディズニーも一方では「砂漠は生きている」をつくっていました。アメリカ人というのは馬鹿だと思っていましたが、なかなか面白くて、具体的に考えているところがあった。そういうものを見ていて、ああそうか、と思った次第なのです。

それで、縄文人の話ですが、先ほど安芸さんも示しましたが、縄文太郎というのが鳥浜貝塚の記念碑として立っています (Fig. 2.2.16)。これは当時の有名な考古学者も加わって相談して、こういう姿になった。こういうイメージはどこからきたのだろう。ギャートルズなのか、古い写真のアイヌなのか、土人・髭もじゃ・裸足・荒縄腰に巻いて、なんていう姿です。何も根拠はないと僕は思いますが、これが縄文人の姿だとなって、みんな、「おーすごい」と思っていたわけです。ところがその鳥浜貝塚からは、赤い漆で塗った櫛が出ているのです。そのような櫛は、この縄文太郎の頭にどうやって使いますか。その櫛は髪を梳くようなものではなくて、明らかに装飾を意図しています。シカの角から削り出した透かし彫りのついた櫛も他の遺跡では出ているし、他にも赤い漆塗りでデコレーションの多いものはたくさんあります。その一方で、このギョロ目と裸足という「縄文太郎」はオウム真理教の麻原彰晃みたいになっている。だから、この像を「取り外してくれ」という要望が、地元住民からは出たそうです。これを何の疑問も持たずに受け入れていたというのが、僕はおかしいな

鳥浜貝塚 福井県若狭町の縄文時代草創期から前期にかけての貝塚。低地の遺跡でもあり、「縄文のタイムカプセル」と称されるほど、他の遺跡では残りにくい多様な植物質遺物が出土した。

遺跡からは翡翠の玉はでてくる ヒスイは日本列島では、新潟県の糸魚川流域でのみ産出するが、列島各地で出土することから、広範囲に流通していたことが分かる。

あ、と思っていたのです。

縄文遺跡を掘っている人は分かると思いますが、遺跡からは翡翠の玉はでてくる、一生懸命に玉にしていたことが分かる。漆塗りの製品は出てくる。それからゴホウラとかスズガイなども出ている。ゴホウラは八丈島の方からきたんじゃないか、奄美の方から来たのではないか、という話がある。青森の方にまで貝輪は行かなかったかもしれないが、汚い土でできた、似たようなものがあったらしい。関東の方はゴホウラの貝輪があって、それがいくつも土器に収めて、置いてあったりと、そういった様々な装飾品が出てきています。

そういう装飾に対しては、すごく縄文人は敏感です。翡翠などのグリーンの色や、貝を磨いたときの鮮やかな白さ。白というのは天然では、なかなかない色です。それから、グリーンの色を作ろうと思ったらどうすればいいのかと言ったら、アメリカ北西海岸インディアンが、真珠貝の裏側みたいなのを貼付けて、もしくは縫い付けて、スパンコールみたいに一面にベターツと塗り付けて、玉のグリーンの色にしている。色というのは、なかなか証拠は残らないですが、例えば草木染めというのは、目をひくような感じにできないので、物足りなかったと思う。だから、私も縄文の服の復元にかかったときに、「あんなか目立たない、汚らしい色になるなあ」と思っていた。ただ、使える色が二つあった、絶対安心して使える色。それが、赤と黒です。縄文の晩期の亀ヶ岡文化の皿形土器に黒と赤を使って入り組んだ模様を描いたものがある。それで、赤と黒は使える、となった。

安芸さんの話でも出てきましたが、この「縄文人の家族生活」の初版でもまだ、上着を作る度胸はなかった。だけど、祭りの絵では、みんな裸になって汗かくからいいか、ということにした (Fig. 2.2.12)。安芸さんは群衆を描くのは得意だった。一人だけ描いたら、みんな「わあっ、そこおかしい、ここおかしい」と言うと思いますが、いっぱい書いたら、赤信号みんなで渡れば怖くないというようなことです。祭りの光景を描くために、何人かで、わざわざ信州に御柱

ゴホウラは八丈島の方からきたんじゃないか ゴホウラは奄美大島以南の南西諸島に産出する貝で、特に弥生時代以降に九州などでも出土する。八丈島から本州島へ運ばれた貝としてはオオツタノハがあげられ、遠距離を運ばれた貝の名を混同してしまったようである。

汚い土でできた、似たようなものがあったらしい 北関東から東北地方の縄文時代後期の遺跡からは、確かに土製の腕輪状製品が出土する。白い粘

土を選んだり、白色顔料を塗布している例もあるので、貝に似せる意図があったと考えられる (吉田 2008b)。

関東の方はゴホウラの貝輪があって、それがいくつも土器に収めて、置いてあったり 千葉県古作貝塚から蓋付きの土器の中に貝輪が収められたまま出土した例がある。ただし、貝の種類はゴホウラではなく、オオツタノハやベンケイガイなどである。



Fig. 2.3.2 縄文マンガにおけるクリ林（佐々木・さかい 1996b）



Fig. 2.3.3 縄文ファッションショー 1

祭を見に行きました。私はどこかから登って見ようとして傘で突かれて落とされた。安芸さんはその話をよくします。祭りに谷の蹴落としというのがあって、僕は前々回、谷の反対側の特等席のようなところから見て、こういう迫力はいいなあと思った。黒と赤が自由に使える中で、何か迫力を出したい、というのが私たちの目的でした。

さかいひろこさんが『風のまほろば』という縄文のマンガを書きました。そのなかのこれが一番好きな絵です。これはクリの花 (Fig. 2.3.2) を描いています。三内丸山遺跡でクリを栽培していたという説があって、それをもとにしている。花粉分析の結果から考えて一面にクリの花があるという絵です。僕は彼女の書いたものの中でも、これが一番好きな絵です。花粉分析の成果をここまで表現できる、またイメージできるというのに、私は感激いたしました。

ある時、髪飾り、櫛、簪、さらにお面を復元しましたが (Fig. 2.3.3)、これなどはびっくりするくらい坪井正五郎の復元画に似ています。そしてこの服は本当の革できていて、模様は安芸さんが手で描いていた。「僕にも描かせてくれ」と言ったら断られました。体に合わせて、ボディコンシャスにしました。

さかいひろこさんが「風のまほろば」という縄文のマンガ 1996年に上下巻で刊行された『縄文冒険コミック 風のまほろば』は原作：佐々木守、

作画：さかいひろこ、監修：小山修三。マンガの中には、21世紀から縄文時代にタイムスリップした栗山文造という考古学者が登場する。

苦労して松本先生と相談しながら、作りました。腕には貝輪をつけている。それから、土偶なんかを参照して、首輪もしていたに違いないと考えて首輪もつけた。革の服の縁のところはくるっと巻いたりして落ち着かない。だから、重い縄みたいのを縁取りする事によってピタッと落ち着く。それから、これを作った時に気がついたのは、こういう模様はひよっとしたら、張り付け文様じゃないかと思った。革というのは、破けたり穴があいたりして、それを修理するには、縫うよりも上からアップリケみたいなものを貼り付けた方が直しやすい。今、化学繊維系のダウンジャケットでも穴が空いたときに縫うのではなくてテープを貼るという方法があるらしい。髪はちゃんと結ってもらいました。

考古学者は「いや、私たち専門家なんです」とか「30年もやっています」とか、「君たちが知らない事を教えてやるんだ」という態度に出る事が多いです。私は文化人類学というか、民族学者ですから、目線をみんなと一緒に合わせる事が大事だと思っている。みんなが楽しいとか、こうしたらもっと綺麗ですよとか、そういうことを狙っている。最近縄文食というようなものが出てきていますが、本当に縄文食を作ったら、おそらくとても食べたものではない。だから、小麦粉を使って、少し渋みが欲しい時にドングリの粉を少し入れたりしている。全部純粋に、「縄文式」なんてしたら、おそらくほとんど食べたものではないと思う。

先ほど安芸さんが見せた、大阪駅で縄文ガールを歩かせようという話ですが、ひとつだけどうしても駄目なものがあつた。靴です。縄文の靴を履いたら、もうドタドタ。なぜかというと、靴というのは、踵とその先を合わせて、ゲートルというか脛当てがあつて、という具合に複合材なのです。今は技術が発達したから全体を縫い合わせてありますけれど、靴というものは、昔は足半（あしなか）みたいに足の先だけであるとか、踵だけ、というように、いくつもの部品を合わせて作るものなのです。だから靴は普通のものを履いてもらいました。そんなドタドタの靴を履いて、大阪の駅中歩いてたら、台無しになってしまう。群馬か埼玉で縄文のイベントをやりますと言うので行ったみたら、女の人が顔



Fig. 2. 3. 4 縄文ファッションショー 2

を真っ黒にして、頭ぐしゃぐしゃにして何かかぶって「ああ縄文人だ一、わーいわーい」と言っていました。みんなそんな格好できないから、こそこそ逃げて行きました。

これは久々野町と言う、今は高山市になっている街でファッションショーをやったときの写

真です (Fig. 2.3.4)。女の子は、最初は「嫌だ嫌だ」と言って、「汚い、顔に墨塗られて出るのか」と思っていたらしいけど、僕らが入って行って、この服をみんなに着せて、出番の前に楽屋裏で髪の毛を直したりした。そしたらその女の子たちが、目がキラッと光って、「お前もう出なくていいよ」と言ったら怒りました。噛み付いてくるんじゃないかと思うくらい、入れ込んできた。それでそのファッションショーも大流行りになった。その次は、子どもたちによる縄文の劇を作った。そうするととどまるところなく、みんなの色々なイメージが出てきました。僕はイメージは綺麗でなくちゃいけないと思っています。これが臭くて汚くて黒くて、というようなものじゃ嫌でしょう。縄文に対して「エコ」なイメージを求めたり、「自然に帰れ」とかいいますが、本当に自然に帰ったら酷い事になりますよ。この間ベトナムに行きましたが、今の人に下宿させたら耐えられないでしょう。今の日本人の清潔感でトイレも水洗じゃないと駄目となっていますが、ベトナムでは、そのうんちは豚が食うよとか、そしてその豚を食えるよ、という感じになってくるわけです。それを汚いと思う人は行かなくなるでしょう。だから人を泊めるような所は、トイレは工事していて綺麗にしています。全部縄文のものがいいか、というと、多分あなたたちも受け入れられないでしょう。だから、そう言うみなさんが、受け入れられるような格好でファッションを作ろうと思いました。だから、どんどん変わっていいと思う。

これが今日の話のポイントになりますが、博物館に展示するとなったら、どうしたらいいか、という問題です。僕はみんなが縄文を楽しむということが大事だと思います。縄文は考古学者だけのものではない、と滅びてしまった学者としてはそう思いますね。

最近考えていることですが、現代の土偶とは何か。それはマリリン・モンロー



Fig. 2.3.5 土偶とマリリン・モンロー

だという話をしたい (Fig. 2.3.5)。なぜか。これは分かりにくいですが、一番左に見えているのは、ヴァレンドルフのヴィーナスというだいたい3万年前の石で作った像のレプリカです。その隣りはフランスのレスピューグ、そのまたとなりはドルニ・ベストーニというチェコの遺跡から出てきたもののレプリカです。この三つは、だいたい2万、

3万年前のものですが、これらはおっぱい、それからお尻、それからこの性器というところが特徴です。顔はないです。これらの特徴は縄文の古い土偶に共通している。2万年か、2万5千年前か、ヨーロッパにいたやつがドドドッとマンモスと一緒にこの北のステップあたりを伝わってきて、それがどうも縄文時代にも入ってきている感じがします。滋賀県の相谷熊原遺跡とか三重県の粥見井尻遺跡などの、小さくて顔・頭がなくて、なんとなく貧弱だけとおっぱいがあるというものと共通している。その隣りは、中からぐーっと出てくる恐ろしいマトリョーシカです。それから、真ん中の汚い土偶は三内丸山のグループの人たちが作ったものです。その右の日本で今一番綺麗な、大型で目立つ土偶というのは、山形県の縄文のヴィーナスで、国宝です。やはりおっぱいは小さいけれど、お尻が大きくて、立像です。その前にある小さいものは、アムレットみたいなお守りとして持っていたのでしょうか。その右は模造品でもなくて、ボランティアたちが趣味で作ったものです。「先生これあげる」と言ってくれたものです。

ではなぜ現代の土偶はマリリン・モンローなのか。これは「七年目の浮気」という映画のシーンをもとにしたもので、友達がクリスマスのツリーの飾りだと言って持ってきたものです。アメリカから送ってくれた。このマリリン・モンローと土偶はどう違うか。これは私の屁理屈ですが、これまでの土偶は全部、多産の願い、子孫を作る、豊穡の女神、そういう解釈がある。おっぱいがみたくらいからといってこういうものを飾って見る人は少ないと思うので、多産の願いがあった。ところが現代はもう人口が増えすぎて、子どもをたくさん産む必要はない。その前の段階で楽しんで終わり。個人個人の考えは別ですが、無理矢理言えばそういうところも現代はある。だから、マリリン・モンローはセックス・アピールの段階で止まっている。土偶というものだけ考えても、いろんな解釈ができるもんだなあと思います。みなさんはどういう土偶をつくりますか？

滋賀県の相谷熊原遺跡とか三重県の粥見井尻遺跡
縄文草創期の土偶を出土した遺跡。